

長尾山古墳第1次発掘調査概報

2008年9月

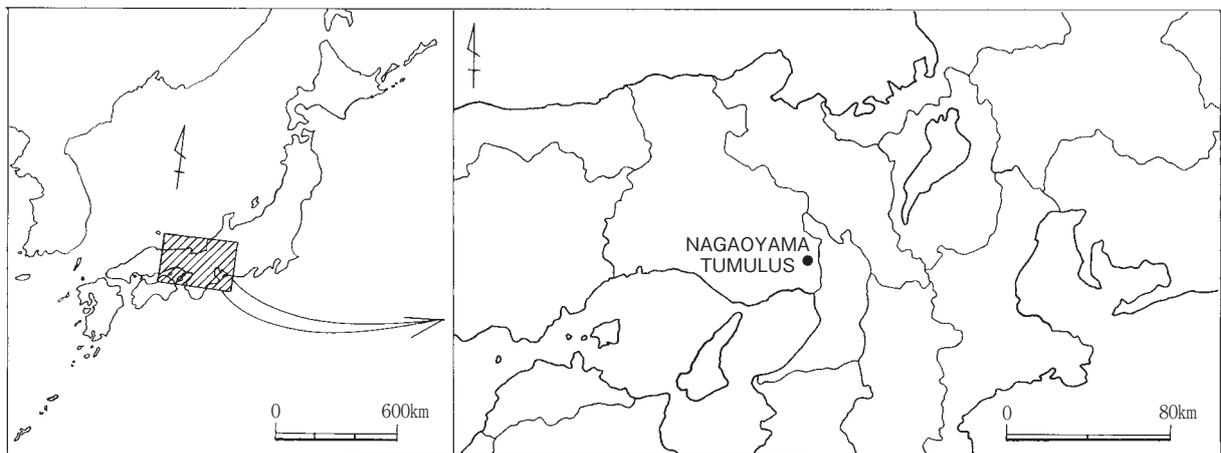
大阪大学文学研究科考古学研究室



西クビレ部の構造（手前が前方部側）

例 言

1. 本書は兵庫県宝塚市山手台東1丁目4-424（旧宝塚市切畑字長尾山）に所在する長尾山古墳の発掘調査概報である。調査は今後も継続する予定であるので、本書で報告する調査を第1次調査とした。また、発掘調査と併行して行った測量調査の成果も収載している。
2. 現地での調査は大阪大学文学研究科考古学研究室が主体となって2007年8月27日～9月24日に実施し、文学研究科教授福永伸哉、同准教授高橋照彦、同助教寺前直人が担当した。出土資料の整理分析および本書の作成作業は、2007年10月～2008年7月にかけて大阪大学において行った。
3. 現地調査、整理分析作業の参加者名は第1章に記す。写真撮影は、遺構をおもに寺前、遺物を福永が担当した。製図の分担は挿図目次に示した。
4. 本書におけるレベル高はすべて海拔を表し、北方位は座標北を示す。
5. 本書作成の過程で後円部のトレンチ名称を整理したため、2007年9月に開催した現地説明会における配付資料のそれと異なる部分がある。
6. 本書の執筆は福永、寺前のほかに、田中由理、中久保辰夫、木村理恵、酒井将史、高上拓、田村美沙、前田俊雄、野島智実、横地勲が分担して行った。執筆者名は目次および執筆箇所末尾に記した。編集は、調査参加者の援助を得て福永が担当した。



遺跡位置図

長尾山古墳第1次発掘調査概報

目 次

巻頭図版

例 言

第1章 調査経過	1
1 周辺の古墳	中久保辰夫 1
2 調査経過	福永 伸哉 3
3 謝 辞	福永 6
第2章 調査成果	7
1 墳丘の現状と測量調査の成果	野島 智実 7
2 発掘調査の成果	8
(1) トレンチの配置	寺前 直人 8
(2) 後円部第1トレンチ	木村 理恵 10
(3) 後円部第2トレンチ	木村 10
(4) 後円部第3トレンチ	高上 拓 10
(5) 後円部第4トレンチ	高上 10
(6) 西クビレ部第1トレンチ	田村 美沙 11
(7) 西クビレ部第2トレンチ	前田 俊雄 12
(8) 前方部第1トレンチ	酒井 将史 14
3 墳丘構造の復元	寺前 16
第3章 出土遺物	18
1 埴 輪	田中 由理 18
2 土 器	酒井 20
第4章 古墳築造の土量算定と所要労働量の推定	横地 勲 21
1 算定の方法	21
2 旧地形と墳丘の築造	21
3 土量算定と所要労働量	22
第5章 調査のまとめ	福永 24
図 版	

図 版 目 次

- 巻頭図版 西クビレ部の構造（手前が前方部側）
- 図版 1 1 長尾山古墳の立地（中央頂部、南から）
2 西クビレ部付近の墳丘現状
- 図版 2 1 後円部第1トレンチ（南西から）
2 後円部第2トレンチ（西から）
- 図版 3 1 後円部第3トレンチ（北西から）
2 後円部第4トレンチ（北西から）
- 図版 4 1 西クビレ部第1トレンチ（南西から）
2 西クビレ部第1トレンチ葺石・埴輪部分（南西から）
3 同（西から）
4 西クビレ部第1トレンチ1段目テラスと2段目斜面（北西から）
5 西クビレ部第1トレンチの土層堆積（東から）
- 図版 5 1 西クビレ部第2トレンチ（南から）
2 同（南から）
- 図版 6 1 西クビレ部第2トレンチの土層堆積（南西から）
2 前方部第1トレンチ（南東から）
3 前方部第1トレンチ1段目と2段目（右奥）の葺石
- 図版 7 1 埴輪（胴部、口縁部）と土器 外面
2 埴輪（底部）外面
- 図版 8 1 埴輪（胴部、口縁部）と土器 内面
2 埴輪（底部）内面

挿 図 目 次

- 遺跡位置図（前田製図）…………… iii
- 図 1 周辺の古墳分布図（中久保製図）…………… 2
- 図 2 長尾山古墳の位置（森暢郎製図）…………… 4
- 図 3 調査のひとこま…………… 5
- 図 4 1969年の墳丘測量図（『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集より）…………… 7
- 図 5 長尾山古墳の墳丘測量図と調査区配置（野島製図）…………… 9
- 図 6 後円部第3（手前）・第4（奥）トレンチ…………… 10
- 図 7 後円部第4トレンチの礫石…………… 10
- 図 8 西クビレ部第1トレンチと第2トレンチの位置関係（岡本晋輔製図）…………… 11
- 図 9 西クビレ部第1トレンチ 平面・立面・土層断面図（金澤雄太製図）…………… 13
- 図 10 西クビレ部第1トレンチ（南西から）…………… 14

図11	西クビレ部第2トレンチの転落石	14
図12	西クビレ部第2トレンチ 平面・立面・土層断面図（大川沙織製図）	15
図13	前方部第1トレンチ 平面・立面・土層断面図（露原有紗製図）	16
図14	墳丘形態の復元（中久保製図）	17
図15	内面のケズリ調整	18
図16	受口状突帯	18
図17	出土遺物実測図（酒井製図）	19
図18	墳丘築造過程の復元（酒井、横地製図）	22

表 目 次

表1	長尾山古墳の築造土量算定（横地作成）	23
----	--------------------	----

第1章 調査経過

1 周辺の古墳

長尾山古墳が所在する北摂西部地域は、現在の兵庫県東南部と大阪府北西部にまたがり、北部に北摂山地が、南部は大阪湾に面する西摂平野が広がる。平野の西側には武庫川が、中部には猪名川が南流し、この流域には数多くの古墳が築造されている（図1）。ここでは長尾山古墳が位置する長尾山丘陵を中心に、周辺の古墳を時期ごとに概観したい。

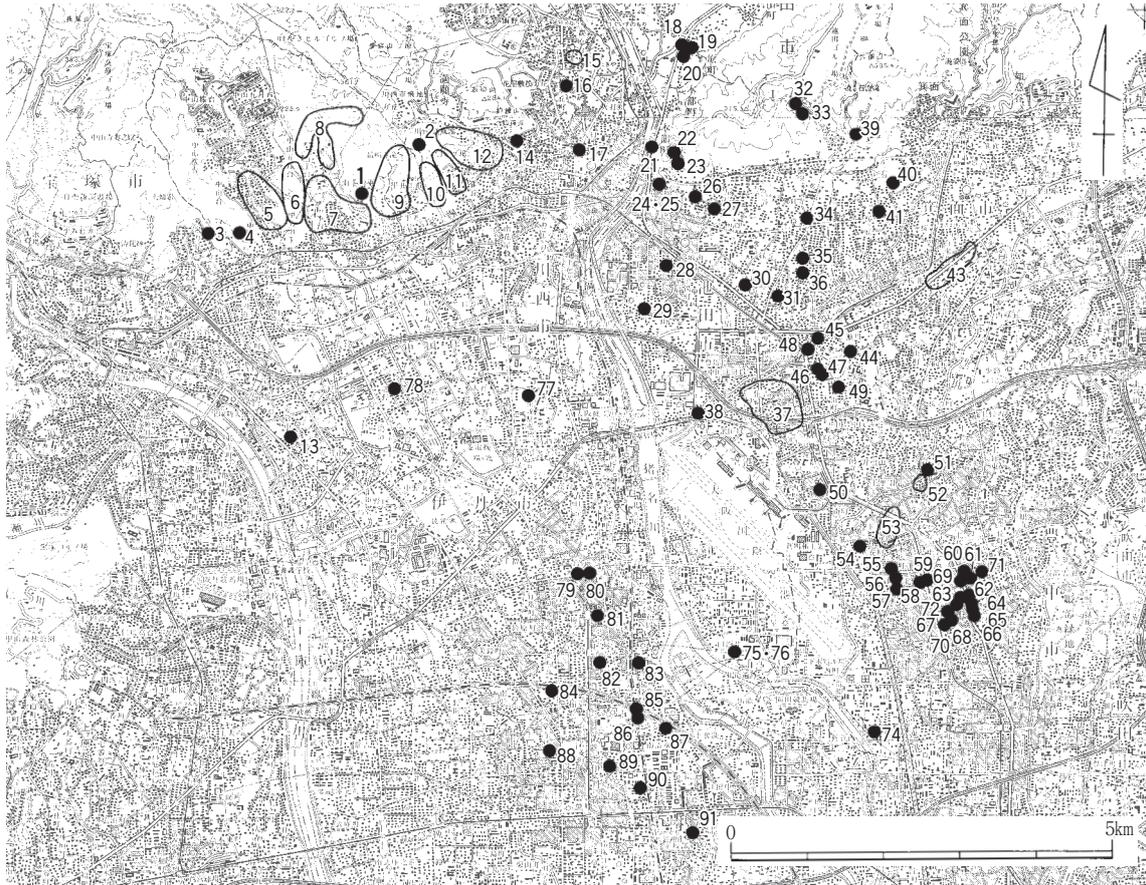
古墳時代前期には、おおむね前期後半から北摂地域各地に古墳の築造が認められると考えられてきた。丘陵に目を向けると、長尾山丘陵に長尾山古墳（1）、万籟山古墳（前方後円/54m：2）が築かれ、五月山丘陵には池田茶臼山古墳（前方後円/62m：26）、娯三堂古墳（円/27m：22）が、待兼山丘陵にも待兼山古墳（前方後円？/不明：44）と麻田御神山古墳（前方後円？/不明：50）が築造される。同様に、台地上や平野部においても、豊中台地には桜塚古墳群のうち大石塚古墳（前方後円/76m：56）、小石塚古墳（前方後円/49m：57）、嫁廻塚古墳（円/30m：68）が、武庫川左岸平野部には安倉高塚古墳（円？/不明：13）が、猪名川中流域平野部には猪名野古墳群のうち上臈塚古墳跡（前方後円/70m？：79）、池田山古墳（前方後円/71m：88）などの古墳が築かれる。

このように、各地に前期前方後円墳の築造が認められるが、今回の調査が始まる以前は長尾山古墳のみが前方後方墳の可能性が高いと考えられてきた。また、その所属時期に関しても、前期後葉とする説（櫃本1971、森岡・吉村1992、福永2004）と中期初頭に位置づける説（橋本1975）があり、評価が定まっていなかった。

古墳時代中期には、前期と一転して、前方後円墳や大型円墳といった有力古墳の築造は、豊中台地における桜塚古墳群や猪名川中流域の猪名野古墳群に限られるようになる。桜塚古墳群では、豊中大塚古墳（円/56m：61）、御獅子塚古墳（前方後円/55m：62）、狐塚古墳（前方後円/不明：64）、北天平塚古墳（前方後円/30～35m：65）、南天平塚古墳（円/20m：66）の順に連綿と古墳が築造されている。同様に、猪名野古墳群においても中期前葉から伊居太古墳（前方後円/92m：91）、御願塚古墳（前方後円/52m：84）、御園古墳（前方後円/60m：90）、南清水古墳（前方後円/46m：86）が築かれている。こうした築造状況の中、長尾山丘陵において長尾山古墳が中期に築造されているとすれば、北摂各地の中で例外的な存在となる。そのため、この地域の首長墳系列を考えるうえで、長尾山古墳の時期的な位置づけが問題となるのである。

古墳時代後期になると桜塚古墳群が衰退する一方、それまでしばらく有力古墳の築造がみられなかった長尾山丘陵や五月山丘陵にふたたび前方後円墳があらわれる。長尾山丘陵においては、後期前半に勝福寺古墳（前方後円/41m：16）が出現し、後期後半には、雲雀丘古墳群（12）など丘陵斜面の尾根沿いに約200基以上から成る群集墳が形成される。五月山丘陵南麓では横穴式

2 周辺の古墳



国土地理院発行5万分の1地形図（「広根」「大阪西北部」）を使用

1 長尾山古墳	20 木部桃山遺跡	39 新稲古墳	57 小石塚古墳	76 田能遺跡第2号
2 万籟山古墳	21 紅葉古墳	40 桜古墳	58 桜塚古墳	77 緑ヶ丘古墳群
3 中山荘園古墳	22 娯三堂古墳	41 中尾塚古墳	59 荒神塚古墳	78 荒牧古墳
4 中山寺白鳥塚古墳	23 娯三堂南古墳	42 稲荷社古墳	60 小塚古墳	猪名野古墳群(79-91)
5 中筋山手古墳群	24 城山古墳	43 太鼓塚古墳群	61 豊中大塚古墳	79 上臈塚古墳跡
6 中筋山手東古墳群	25 池田城下層	44 待兼山古墳	62 御獅子塚古墳	80 有岡城遺跡(204次)
7 山本古墳群	26 池田茶白山古墳	45 待兼山2号墳	63 出雲塚古墳	81 鴨塚砦古墳跡
8 山本奥古墳群	27 五月ヶ丘古墳	46 待兼山3号墳	64 狐塚古墳	82 南本町遺跡古墳群
9 平井古墳群	28 宇保稲津彦神社古墳	47 待兼山4号墳	65 北天平塚古墳	83 猪名寺廃寺
10 雲雀丘西尾根古墳群	29 脇塚古墳	48 待兼山5号墳	66 南天平塚古墳	84 御願塚古墳
11 雲雀丘東尾根古墳群	30 鉢塚古墳	49 石塚古墳	67 女塚古墳	85 園田大塚山古墳
12 雲雀丘古墳群	31 二子塚古墳	50 麻田御神山古墳	68 嫁廻塚古墳	86 南清水古墳
13 安倉高塚古墳	32 善海1号墳	51 金寺山廃寺(1次)	69 桜塚38号墳	87 食満塚古墳
14 豆坂古墳群	33 善海2号墳	52 新免宮山古墳群	70 桜塚39号墳	88 池田山古墳
15 萩原古墳群	34 野田塚古墳	53 新免古墳群	71 桜塚42号墳	89 柏木古墳
16 勝福寺古墳	35 狐塚古墳	54 山ノ上遺跡(10-14次)	72 桜塚43号墳	90 御園古墳
17 小戸遺跡	36 石橋古墳	桜塚古墳群(55-73)	73 桜塚44号墳	91 伊居太古墳
18 木部1号墳	37 宮ノ前古墳群	55 御位塚古墳	74 利倉南遺跡(1次)	
19 木部2号墳	38 豊島南遺跡	56 大石塚古墳	75 田能遺跡第1号	

図1 周辺の古墳分布図

石室2基を内包する二子塚古墳（前方後円/45m：31）が後期前半に築造され、後期後半には大型横穴式石室を有する鉢塚古墳（円/45m：30）がつづく。古墳時代終末期においては、各地における古墳築造が終焉を迎えていく中で、長尾山丘陵には刳拔式家形石棺を持つ中山寺白鳥塚古墳（不明/不明：4）や八角形の墳丘プランを呈する国史跡の中山荘園古墳（八角/14m：3）が築造される。

以上のように、北摂西部地域における古墳の築造状況には、時期によって小地域ごとに特徴的

な変化が認められ、古墳の時期や墳形、規模は当地域における有力者の政治的な動向を考える上で重要な情報となる（福永2004）。（中久保辰夫）

2 調査経過

大阪大学考古学研究室では、地域の首長墳の築造動向を分析することにより、古墳時代の中央と地域の政治的関係の変化や、そこに反映した中央政権内の勢力交替などを検討し、この時代の政治史や国家形成過程における位置づけなどを明らかにする研究を続けてきた。1980年代から1990年代にかけては京都府南部の乙訓地域をフィールドとし、地元教育委員会と共同で数基の首長墳の発掘調査を行い、一定の成果を得て世に問うことができた（福永編1990、都出・福永編1992、清家編2000、寺前・高橋編2005など）。

2000年代からは、そうした視点による第二のケーススタディとして、大学の所在する摂津西部地域の猪名川流域を対象にあらたな調査研究に着手し、2000年から2004年にかけて実施した兵庫県川西市勝福寺古墳の測量・発掘調査では、当地域の古墳時代後期の歴史に新たな像を提示した（寺前・福永編2007）。

この勝福寺古墳が所在する猪名川西岸の長尾山丘陵は、古墳時代前期には梅原末治の調査で学史的にも知られる摂津万籟山古墳が築造されるのをはじめ（梅原1937）、後期後半には西摂屈指の群集墳地帯となり、さらに終末期には中山荘園古墳（直宮編2007）が続くなど、首長層の動きを長期にわたってたどることが期待される好適なフィールドである。そうした中で長尾山古墳は、この丘陵上にある有力古墳として1960年ごろから学界に存在が知られるようになったものの、発掘調査が行われていないために基本的な内容がきらかではなかった（図2）。1969年には宝塚市教育委員会と夙川学院短期大学日本歴史研究会によって墳丘測量調査が行われ、前方後方墳の可能性が指摘されたが確定的ではなく、築造時期についても前期説、中期説が並存する状況であった。そこで私たちは、猪名川流域の首長墳系譜を分析するうえで長尾山古墳の実態解明が不可欠と考え、この古墳に対するはじめての発掘調査を計画した。

2006年9月に福永が現地を踏査した際に石列の露出や埴輪片の散布などが確認されたので、そうした部分を中心に墳丘裾周りのトレンチ調査から着手する方向で検討を開始し、地元宝塚市教育委員会とも協議しながら、2007年度に大阪大学考古学研究室を主体とする発掘調査および墳丘測量調査を実施する方針を決定した。

2007年5月以降は実施計画について市教委および兵庫県教育委員会と細部の調整を行う一方で、研究室内の勉強会を立ち上げ、出土が予想される埴輪や猪名川流域の古墳にかんする先行研究を整理しながら、参加者が調査の目的と課題を共有できるように努めた。

そうした準備を経て、2007年8月27日に現地での調査を開始した。例年になく厳しい残暑のなかでの作業ではあったが、9月中旬までには西クビレ部と前方部前端において原位置の葺石を検出し、後円部でも本来の葺石位置をある程度反映する礫石群を確認することができた。また、西クビレ部から前方部にかけては樹立状態のものを含む多くの埴輪片が出土し、後述するようにこ

4 調査経過

の古墳の築造時期を検討する有力な手がかりとなっている。樹立状態の埴輪については、次年度以降の継続調査の可能性を考慮して、西クビレ部第1トレンチの1本のみを取り上げたほかは現状のままで残している。なお、併行して実施した測量調査も順調に進み、その成果を参考にしながら調査区を追加設定したので、最終的なトレンチは7カ所となった。

9月17日までに各トレンチの写真撮影を終え、18日には報道発表を行った。22日には、晴天のもと約350名という多数の来訪者を迎えて現地説明会を開催した。長尾山古墳における初めての発掘調査ということもあってか、市民の関心の高さがうかがえた。その後、補足的な実測作業のちにトレンチの埋め戻しを行い、9月24日をもって現地での調査作業を終了した。約1ヶ月間にわたった現地調査の進行状況は、毎日インターネットのサイトで公開し、閲覧した市民が現地説明会に参加されるなど、ある程度の周知効果を得ることができた。出土資料の整理分析作業は、2007年10月～2008年7月まではほぼ週2回のペースで継続的に行い、その概要を本書として編集した。なお、2008年5月以降の作業は、科学研究費補助金（基盤研究B、代表福永伸哉）による研究として実施している。

現地調査および出土資料の整理分析作業の参加者は以下の通りである。

福永伸哉、高橋照彦、寺前直人（以上、文学研究科教員）、田中由理、中久保辰夫、木村理恵、酒井将史、高上拓、田村美沙、前田俊雄、野島智実、金澤雄太、森暢郎（以上、文学研究科）、友田知津子、森葵、古谷暢也、大川沙織、岡本晋輔、露原有紗、河井千枝、川村奈央子、島田翔、高松由、仲辻慧大、平木優吾、向川侑大、山中良平、上地舞、北原梨江、城内龍一、西川恭兵、

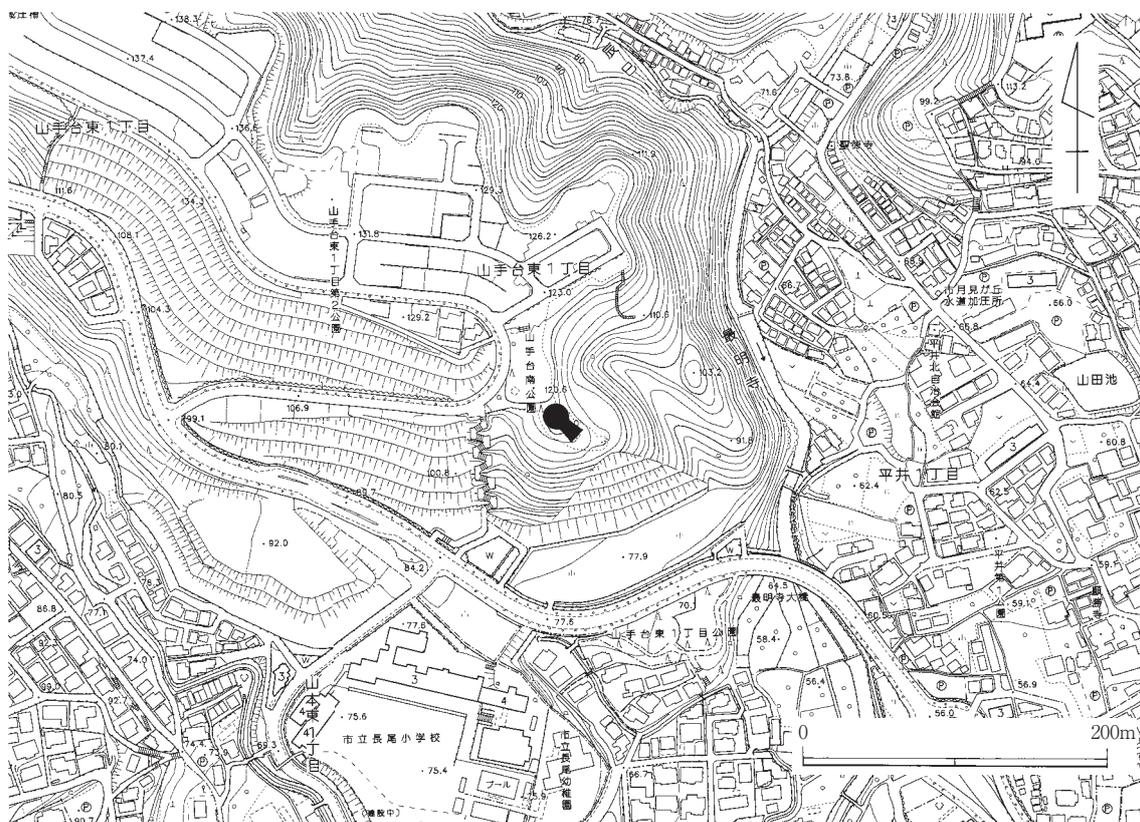


図2 長尾山古墳の位置



図3 調査のひとこま

6 謝 辞

石崎雄大、増田朱香、土取真以子、奥田麻希（以上、文学部）、木村友紀（文学部研究生）、横地 勲（文学部科目等履修生）、藤田健司（工学部）、安田智一（理学部）、谷崎仁美（龍谷大学）、兼光美樹、北野有理、三木範子（以上、神戸女学院大学）。（福永伸哉）

3 謝 辞

調査の実施にあたっては、各方面から多大な援助を得た。宝塚市教育委員会の方々には計画立案の初期段階から終始お世話になり、とりわけ社会教育課長直宮憲一氏には実務面でいろいろとお骨折りいただいた。兵庫県教育委員会からは大学の学術調査と行政的な取り扱いとの調整について有益なご指導を得た。また、1969年当時に測量調査を指導された現・大手前大学教授櫃本誠一氏は、現場で種々の学術的アドバイスを与えられた。地元の里山整備活動グループ、「櫻守の会」のみなさんには、調査掘削と樹木保護という時として相反する事柄についてご配慮をいただいた。現在古墳は新しい住宅街の公園内に位置しているが、地元の山手台東自治会、阪急不動産株式会社山手台開発事業部、宝塚市公園緑地課からは、円滑な調査の実施にかんしてご理解とご協力を得た。さらに、調査団の宿舎となった宝塚市小浜では小浜自治会のお世話になり、古い宿場の面影が残る町並みの中で調査の疲れを癒すことができた。このほかにも、現地を訪問された多くの研究者、市民の方々に支えられて今回の調査が無事終了したことを記し、感謝の意を表したい。

（福永）

第2章 調査成果

1 墳丘の現状と測量調査の成果

長尾山古墳は、西摂平野を見下ろす長尾山丘陵の南側斜面尾根上に位置する。尾根の東裾には最明寺川が、西方には天神川がそれぞれ南流し、最明寺川は猪名川へ、天神川は武庫川へと合流した後、いずれも大阪湾へ注いでいる。

長尾山古墳は閑静な住宅地の一角、山手台南公園の南西に位置している。里山保全の市民グループ「櫻守の会」の手入れによって、墳丘やその周辺は樹木が四季折々の花をつける景観となっている。墳丘北西には、丘陵下から公園へ登る道や排水溝が敷設されている。また丘陵尾根を南東方向にすこし下った平坦地には東屋が設置され、墳丘裾東側の遊歩道が公園との間を結んでいる。遊歩道より東は急勾配の崖となり、深い茂みが覆っている。

長尾山古墳は宝塚市教育委員会と夙川学院短期大学日本歴史研究会によって、1969年に墳丘の測量調査が行われた(図4)。その成果は、調査を指導した櫃本誠一によって1971年に報告されている(櫃本1971)。櫃本は「北東クビレ部(中略)の等高線は、弧状を描いているが、北部丘陵の切断部にかけての線は直線的」と述べ、北東部分が改変を受けていると考えた上で全長36mの前方後方墳と判断された。またこの時点では、後方部にて粘土礫が露出していると述べられている。

大阪大学考古学研究室でも、今回の発掘調査と併行して25cmの等高線間隔での測量調査を行った(図5)。墳丘の最頂部は標高121.369mで、標高115.75m~112.0m以下は崖となっている。平野部と墳頂部との比高差は43.5m。測量に用いたR1-S1間を通る主軸は座標北より約64度西に傾く。

櫃本の述べるように、丘陵北西部は直線的な等高線を描く。丘陵が緩やかに下っていく南東側とは違い、北西部から西側にかけては斜度が約25度と急傾斜となっている。東西の斜面は、遊歩道や花木、墳丘土の流出などの影響で多少の地形改変はあるが、1969年の測量段階からあまり変わっていない。一方で南北方向にかんしては、古墳の規模しだいでは東屋や排水溝などによって墳丘が削平を受けて

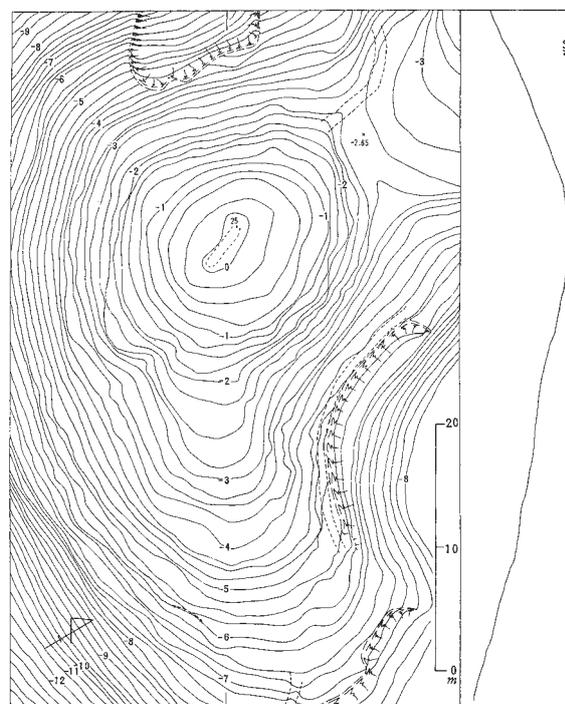


図4 1969年の墳丘測量図
(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集より)

8 発掘調査の成果

いる事態も予想された。また、墳頂部には宅地開発に伴って測量用のコンクリート基準杭が埋設されていた。本調査では、この基準杭を「R1」杭としてそのまま利用している。墳頂部平坦面のプランは楕円形を呈しており、R1を中心とする長径はおよそ6.4mである。なお、櫃本の報告で述べられていた粘土礫の露出は、今回の調査においては確認することができなかった。

測量調査が進むにつれ、西側のクビレ部に相当する辺りから北へ伸びる等高線が、標高116.5m付近から標高119.0mにかけて、緩やかに湾曲して弧状を描いていることが確認された。この部分は樹木も少なく墳丘の残存状況は比較的良いと考えられ、墳形の確認に注意が促された。

墳丘の断面形でみると、墳頂から前方部へ向けてなだらかに下る斜面となっている。墳丘土の流出が激しいかとも考えられたが、前方部側の標高116.3m付近には石列が露出しており、墳端を示していると予測された。

以上が、今回の測量調査の概要である。測量図は1969年時のものと大きく変わらないものとなった。当時の測量調査の正確さが窺われるとともに、櫃本の述べるとおり測量調査だけでは墳形の確定は困難であることが追認された。しかし墳丘北西部側については、公園建設やそれに伴う排水溝や歩道の設置、斜面の急峻さなどから、墳丘土の削平・流出は著しく、本来の地形をあまり留めていないと考えられた。一方、クビレ部西側で確認されたような弧状の湾曲が東側にも見られ、むしろクビレ部付近の残存状況が良好であると判断された。また石列の露出も確認されたことから、長尾山古墳は全体としては本来の外形を留めている可能性が高くなり、墳形の判別も含め発掘調査による再検討の必要性が大きくなった。 (野島智実)

2 発掘調査の成果

(1) トレンチの配置

今回の発掘調査では、1969年の測量当時から課題となっていた墳丘形態および墳丘規模を解明する手がかりを得るために、後円部に4カ所、前方部に1カ所、そして現地表面の地形からクビレ部に該当すると予測された南西斜面に2カ所の計7カ所の調査区を設定した(図5)。

まず、後円部側では現状の墳丘主軸上に後円部第3トレンチを設定し、墳裾を確定させるためにさらに東側にも後円部第4トレンチを設けた。また、墳丘主軸に直交する方向に後円部第1トレンチを、主軸とおおよそ45度に交わる角度で後円部第2トレンチをそれぞれ設けた。第3・4トレンチにおいて葺石に用いられたと考えられる人頭大からこぶし大の角礫の堆積が確認された以外は、墳丘流出が著しく原位置での埴輪や葺石等の検出はできず、墳裾の可能性のある傾斜変換点をみいだすことも困難であった。西クビレ部では前方部側に1ヶ所(西クビレ部第1トレンチ)、後円部側にも1ヶ所(西クビレ部第2トレンチ)のトレンチを設け、墳形の確認をめざした。両トレンチとも良好な状況で埴輪基底部分らびに1、2段目葺石が検出された。さらに前方部前面にも墳丘主軸方向に前方部第1トレンチを設け、トレンチ内および周辺において前方部1、2段目の基底石を検出することができた。 (寺前直人)

(2) 後円部第1トレンチ (図版2-1)

後円部第1トレンチは、墳丘上の堆積状況および墳丘南西の墳端を検出することを目的として、墳丘主軸にほぼ直交する位置に設定した長さ3.8m、幅1.0mのトレンチである。

葺石およびテラス面が検出できる可能性を想定していたが、掘削を進めた結果、表土下から礫を含む流土層が確認できたが、テラス面は確認できず、表土下約0.2mで地山が検出された。急斜面であるため、当初の墳丘面はすでに流出したと考えられる。埴輪および原位置の葺石も確認されていない。
(木村理恵)

(3) 後円部第2トレンチ (図版2-2)

後円部第2トレンチは、墳丘上の堆積状況および墳裾ラインを検出することを目的として、東西方向に設定された長さ5.3m、幅1.0mのトレンチである。表土下より礫を含む流土層が確認できたものの、現位置をとどめる葺石やテラス面は検出できなかった。
(木村)

(4) 後円部第3トレンチ (図版3-1)

墳丘北西の墳端を明らかにするために設定したトレンチである。墳丘主軸に沿って南北3.8m、東西1.0mをはかる。調査の結果、墳端を確定することはできなかった。ただ、堆積土中に拳大から人頭大の礫石を認める部分があり (図6)、本来はこれらが葺石石材であった可能性もある。また、調査区北隅付近で標高117.0m付近から深さ0.6m程度の落ち込み状の遺構を検出した。この遺構はトレンチ外にも続いているため性格や規模などは不明であるが、埋土中より埴輪片が出土しているので古墳築造以後のものである。
(高上 拓)

(5) 後円部第4トレンチ (図版3-2)

後円部の墳端を確認し、墳丘の全長を明らかにすることを目的として設定したトレンチである。一部を拡張して最終的には南北4.9m、東西が1~1.8mのL字形のトレンチとなった。調査の結果、墳端にかんする情報は得られなかったが、葺石の残存を確認することができた。以下では葺石の検出状況を中心に記述を進める。

トレンチの北西半では、表土と流土を除去すると人頭大からこぶし大の角礫が標高118.3m~118.7mの範囲より多数検出された。部分的に礫同士が組み合ったような状態で検出されたため、葺石の可能性が高いと判断した。しかし、検出した葺石の下層から埴輪片が出土しており、二次



図6 後円部第3 (手前)・第4 (奥) トレンチ



図7 後円部第4トレンチの礫石

的な移動により葺石は原位置を留めていない可能性が高い。他の後円部側各トレンチとも共通するが、当トレンチでも墳丘土の流出が著しい。こうした流出に伴い葺石全体が原位置からずれ落ちた状態で検出されたものと理解できよう。ただ、礫と礫が密に接した状況を呈していることから（図7）、大きくは動いていないと判断できる。したがって、礫群の検出位置のやや内側に後円部の墳端を想定できる。（高上）

（6）西クビレ部第1トレンチ（図9、図版4）

西クビレ部第1トレンチは、墳丘形態の解明および葺石や埴輪列といった外表施設の確認を目的として設定した。調査開始時には長さ5m、幅1mのトレンチであったが、その後石列が検出されたのでその性格を探るため拡張をおこない、最終的には凸字状のトレンチとなった。

調査の結果、原位置を留めた2段分の葺石および埴輪を検出した。掘削を進めていくと当初に設定したトレンチ北端付近で長径20~30cmと比較的大きな石が列をなしている状況が認められた。残存状況は良くないものの、これらの石を葺石基底石の残存と判断した（1段目葺石）。基底石下端高は標高117.0mである。

また、墳丘斜面上方に拡張をおこなった部分では、掘削をすすめると礫群が検出された。これらの礫中には埴輪片が混ざっており、葺石の転落石と判断した。この転落石を除去すると、長径30cm程度の石が直線的に並んでいるのが確認され、これらの礫を当初の状態を保っている葺石と判断した（2段目葺石）。基底石下端高は標高117.4mで、その上には長径15~20cm程度の角礫が傾斜約45度で積み上げられていた。基底石が直線的に並んでいることから、当調査区において検出された基底石は前方部側のもと考えられる。

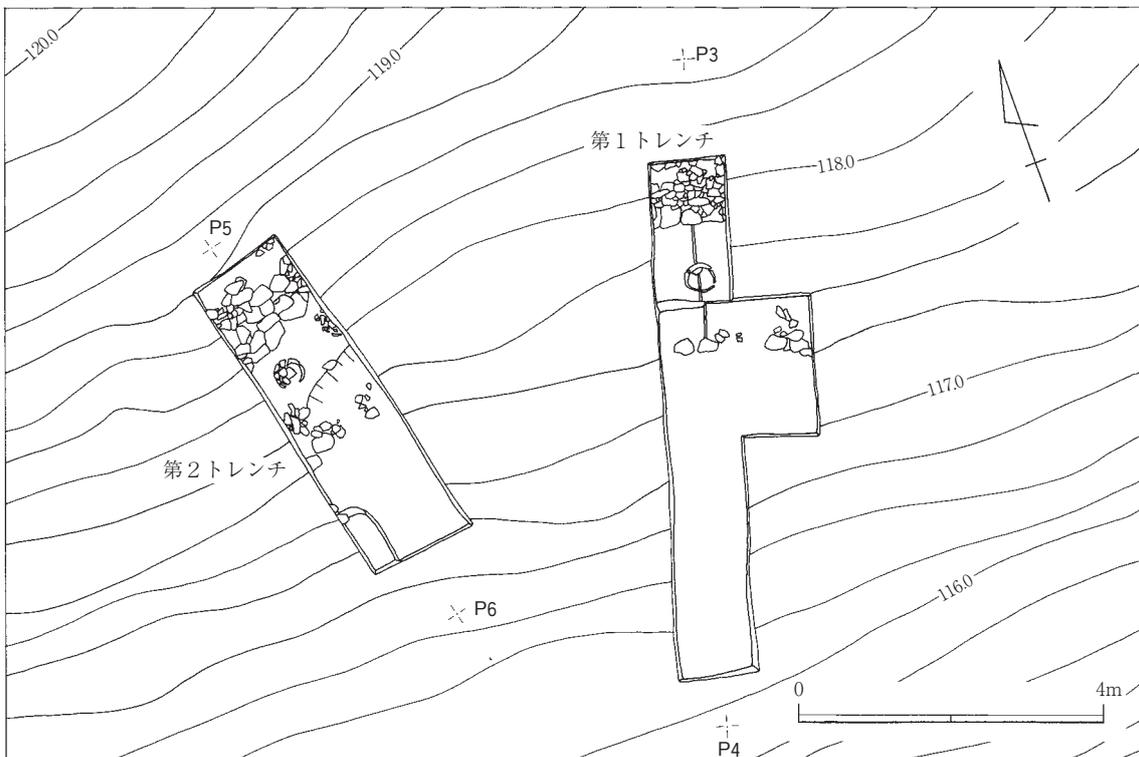


図8 西クビレ部第1トレンチと第2トレンチの位置関係

12 発掘調査の成果

さらに、2段目葺石の基底石の外側には幅1mほどの平坦面を確認した(図10)。2段目基底石から西に約0.7mの位置で底部径40cm程度の円筒埴輪がほぼ原位置を保った状態で出土したことから、この平坦面は1段目のテラス面と考えられる。検出した埴輪の上半部分は失われており詳細は不明であるが、テラス面に樹立されていた埴輪列の様相を復元するのに有効な手がかりとなるだろう。(田村美沙)

(7) 西クビレ部第2トレンチ(図12、図版5・6-1)

西クビレ部第2トレンチは、墳丘形態や外表施設の状況を明らかにするために設定した長さ4.5m、幅1.4mのトレンチである。調査の結果、2段分の葺石およびテラス面、そこに樹立された埴輪列を検出することができた。

このトレンチでは表土下で広範囲にわたって多量の礫が検出された。礫中には埴輪片が混じっていたことから、これらの礫は葺石の転落石であると考えた。そこでこれらの転落石の除去をおこない、本来の葺石の検出をめざした。

転落石の除去をすすめていくと、トレンチの北端から南へ0.2mから1.2mにかけて面をそろえた据わりのよい礫が多数検出された。検出状況から、これらの礫を本来の葺石であると判断した(2段目葺石)。基底石には長径約30cmと比較的大きな石が用いられており、基底石下端レベルは標高117.5mである。2段目葺石は傾斜角約45度で、トレンチ内では標高118.3mまで葺かれていることが確認されている。

またトレンチの中央付近でも礫石が多量に確認された(図11)。精査の結果、大部分の礫が葺石の転落石であることがわかったが、トレンチ中央付近では本来の葺石の位置を保っている可能性がある石列が検出された。この石列は残存状況が悪かったが、2段目葺石と墳丘主軸に対してほぼ同様の角度で並んでいることや、後に述べるように、2段目葺石よりも外側で埴輪列を検出したことなどから、これらの石列を葺石と判断した(1段目葺石)。この1段目葺石の基底石下端レベルは標高117.15mで、2段目葺石の基底石下端レベルを参考にすると1段目の高さはおおよそ0.35mの低いものになる。

このように、西クビレ部第2トレンチでも西クビレ部第1トレンチと同様に2段分の葺石を検出することができたが、クビレ部の屈曲点そのものを検出することはできなかった。ただし西クビレ部の両トレンチでの成果から当古墳の墳形を考える上での重要な知見を得ることができた。西クビレ部第2トレンチで検出された基底石列は、上述した西クビレ部第1トレンチの基底石列の方向と約50度の角度をなして延びている。また狭いトレンチではあるが、やや円弧を描くように走行している。このような角度を考慮すると、西クビレ部第2トレンチで検出された葺石は後円部に葺かれていたもの、西クビレ部第1トレンチで検出された葺石は前方部に葺かれていたものとするのが妥当であろう。このことから長尾山古墳の墳形はこれまでに推定されていた前方後方墳とするよりも、前方後円墳とみるほうがより蓋然性が高くなった。またクビレ部の屈曲点は第1トレンチと第2トレンチの間に存在しているものと考えられる。

なお1段目と2段目の葺石のあいだには幅0.65mの平坦面を確認した。この平坦面では原位置

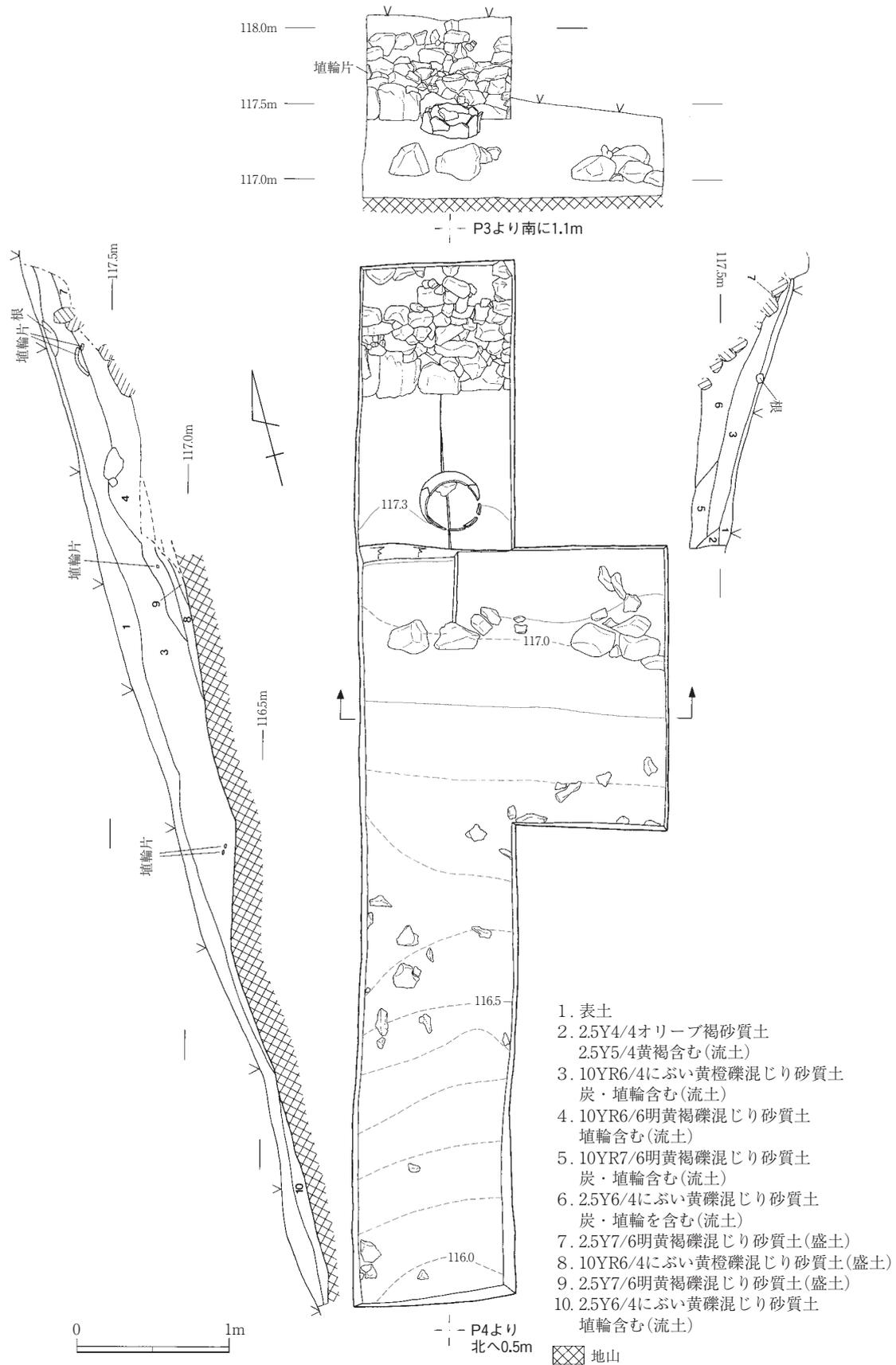


図9 西クビレ部第1トレンチ 平面・立面・土層断面図

を保っていると考えられる円筒埴輪が0.55mの間隔で2本検出されており、このことからこの平坦面は段築成のテラス面と考えられる。円筒埴輪は2段目の葺石の基底石から南に0.4m弱の位置に樹立しており、底部径は約35cmである。これらの円筒埴輪は西クビレ部第1トレンチの円筒埴輪とともに、テラス面の埴輪列の状況を知る重要な手がかりとなるであろう。（前田俊雄）

(8) 前方部第1トレンチ (図13、図版6-2・3)

前方部第1トレンチは、前方部前面の墳端を確認するために設定した調査区である。測量調査時に石の上面が列をなすように並んで露出している様子が観察されたため、石列部分を中心に墳丘主軸方向に長さ4.6m、幅1mのトレンチを設定した。

調査の結果、長径10~30cm大の葺石が面を揃えて2~3段積まれていることが確認できた。この石組みは南西-北東方向に連なっており、前方部前面の葺石の基底部分であると考えられる。この基底石より墳丘側に認められる表土直下の土は、遺物を含まず地山とも土質を異にしていることから盛土であると判断された。基底石外側の斜面では、表土下10~15cmにて地山を検出しており、流土が堆積していた。この流土からは埴輪片が出土しており、前方部にも埴輪を樹立していた可能性を示唆している。

また、調査区外になるものの、トレンチ端から北側、つまり墳丘斜面上方に約1m離れた地点でも複数の石が組み合わさっている状態が確認された。石の重なり方を観察するために清掃を行った結果、長径10cm~60cmの大小の石が面を揃えて南西-北東に1mほど列をなして積まれていることが判明した。この石列は、前方部第1トレンチの基底石列とほぼ平行しており、面を揃えて積まれていることから、葺石の基底石であると推定される (図版6-3)。

第1トレンチ内の基底石を1段目、調査区北側を2段目の葺石と考えると、1、2段目の基底石間の水平距離は約1.9mとなる。また、1段目の基底石下端のレベルは標高約116.0m、2段目の基底石下端のそれは標高116.9mであり、比高差は約0.9mを測る。なお、1段目、2段目ともに本来はさらに上方まで葺石が積まれていた可能性があるが、基底部付近以外は盛土が流出していると考えられ、テラス面などは残存していない。このように、前方部第1トレンチの調査によって、前方部前端的な位置や少なくとも二段の段築をもつことなどが明らかになった。

(酒井将史)



図10 西クビレ部第1トレンチ (南西から)



図11 西クビレ部第2トレンチの転落石

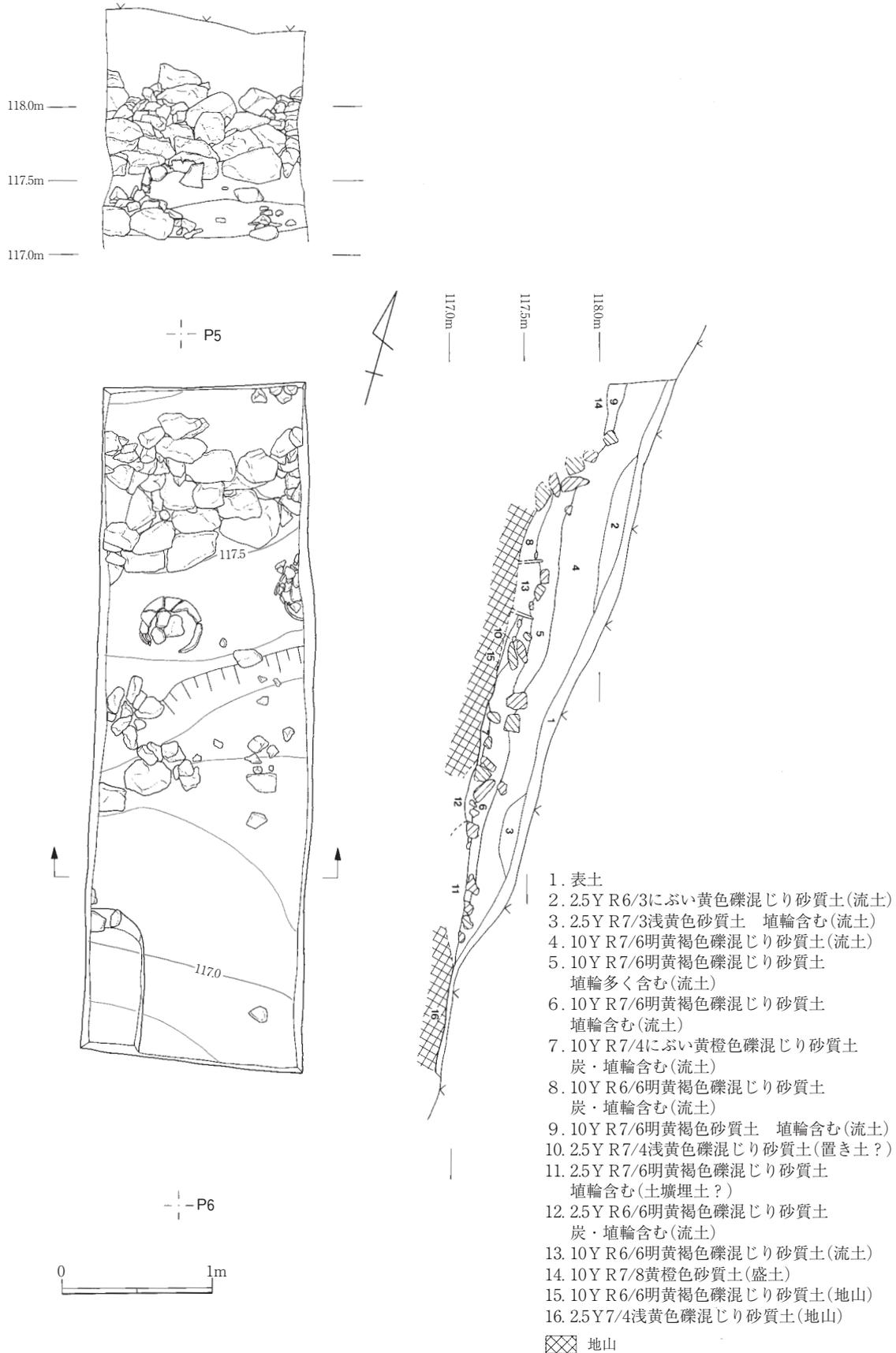


図12 西クビレ部第2トレンチ 平面・立面・土層断面図

16 墳丘構造の復元

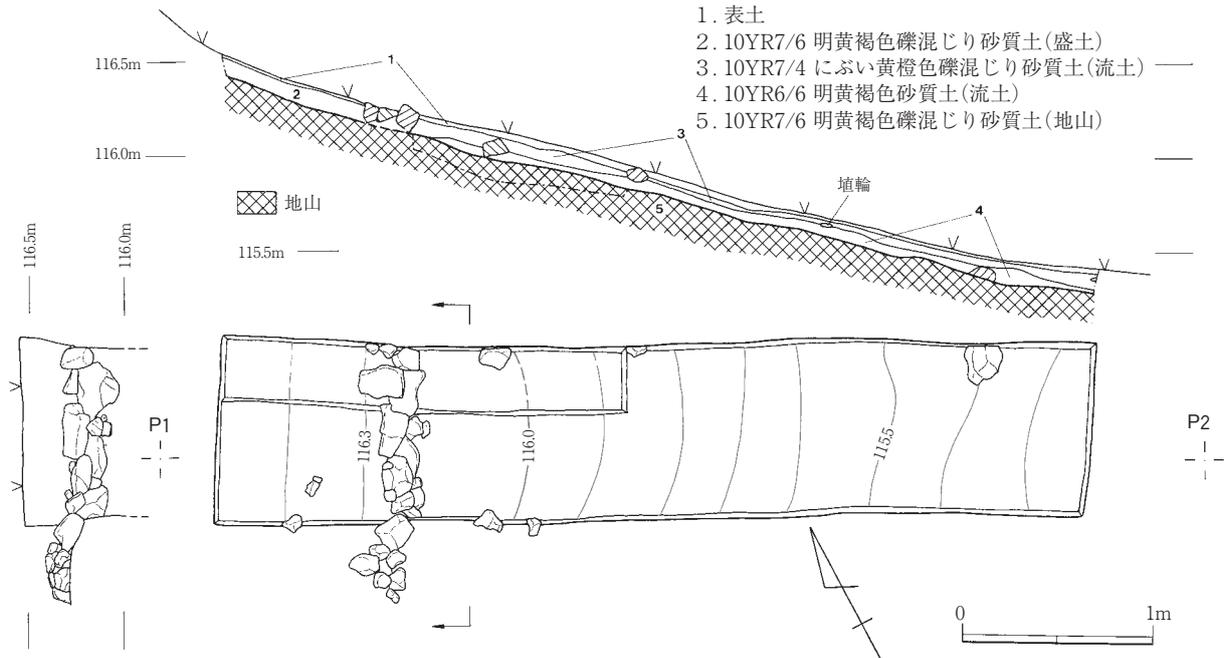


図13 前方部第1トレンチ 平面・立面・土層断面図

3 墳丘構造の復元

測量調査の成果とトレンチ調査の成果をふまえて、長尾山古墳の墳丘構造を復元してみよう。ただし、今回の調査では墳丘西半の墳裾を中心に限られた範囲にしかトレンチを設定しておらず、東半の状況はまったく不明である。したがって、墳丘の詳細については今後の調査に待つべき点が多いことをあらかじめ断っておきたい。

とはいえ、前方部第1トレンチでは標高116.0m付近において1段目葺石基底が、また、後円部第4および3トレンチでも標高118m付近でほぼ原位置を反映している可能性が高い葺石群が検出できたことは特筆されよう。これらの成果により、まず長尾山古墳の墳長はおよそ39mに復元できる。

墳丘の築成については、前方部第1トレンチの発掘調査およびその北方に位置する露出石列の精査の結果、標高116.0mを1段目基底、標高116.9mを2段目基底とする段築構造が明らかとなった。西クビレ部においても同様に2段分の基底石が確認されたが、この付近では1段目と2段目のレベル差は0.35m程度に減少している。

さらに、西クビレ部第1トレンチと西クビレ部第2トレンチで検出された葺石基底石列の走行方向の振れから判断すると、本古墳は前方後方墳ではなく前方後円墳である可能性が高まった。このことは後円部第1トレンチと西クビレ部第2トレンチ間において標高118m前後の等高線がやや円弧状を呈することとも矛盾しない。また、後円部第4トレンチにおける葺石検出位置と西クビレ部第2トレンチにおける基底石の位置に基づいて後円部径を正円で復元するならば、最大で直径26m程度の規模となる。ただし、この場合、墳丘東側が大幅に流出していることとなり、

かつ後円部径に比べ、前方部長が短い墳形を想定せざるをえなくなる。とくに前者の問題は大きい。後円部東側の発掘調査をふまえ、あらためて検討を行いたい。

また、西クビレ部第1トレンチで検出された前方部基底石の走行方向は、現段階で墳丘主軸とするR1-S1方向に対して、やや反時計回りの方向に振れすぎるとも思われる。したがって、今後の調査結果によっては墳丘主軸自体を現状のR1-S1軸より反時計回りに修正する必要も生じてこよう。

以上の課題点を残しつつも、現段階の情報で長尾山古墳の墳丘を暫定的に復元するならば、墳長39m、後円部径26m、前方部長13m程度の前方後円墳という形態を提示できる(図14)。また、前方部、後円部ともに少なくとも二段の段築成を有する構造であるが、墳頂との比高差を考慮すれば、後円部の段築成はさらにもう一段存在し、三段築成となる可能性が高い。(寺前)

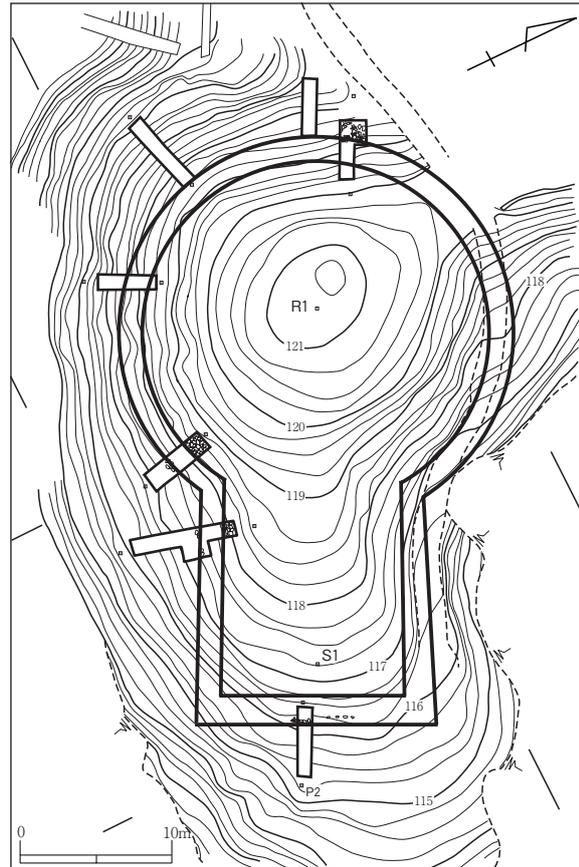


図14 墳丘形態の復元

第3章 出土遺物

1 埴輪 (図15~17、図版7・8)

今回の調査では、埴輪が破片数にして2000点あまり出土した。小片が多く、全体の形状を復元しうるものが少ないので、部位ごとに特徴を述べていきたい。

口縁部にかんしては、円筒埴輪と朝顔形埴輪(壺形埴輪)に大別できる。ともに外面調整はタテハケおよびヨコナデであり、赤彩を施すものもある。前者は、口縁部が外上方に屈曲して直線的に開いており、口縁部の下端には突帯が巡る(図17-1)。復元口径は33cm、円周に対する残存率は15%である。後者については、内面に明確な稜をもたない二重口縁部が認められる(3・4)。口径は30cm、残存率は20%を測る(3)。これらの口縁部は、外上方に伸びる頸部(8・9)と組み合わせると考えられる。

胴部については、外面はタテハケ、内面はケズリ調整(図15)が行われており、復元径は24~29cm、残存率10%程度である。突帯については、断面台形状の通有の突帯もあるものの(7)、受口状突帯(図16)が多く存在することは注目される(5・6)。奈良県東殿塚古墳例、大阪府玉手山3号墳例のような初現期の朝顔形埴輪になる可能性が高いが、受口状突帯の出土数が目立つので、突帯すべてが受口状を示す奈良県赤土山古墳例のような埴輪も想定しておく必要があるだろう。全体に破片数の割には突帯片が少ないように思われるので、段数の少ない低い器高の埴輪であった可能性もある。

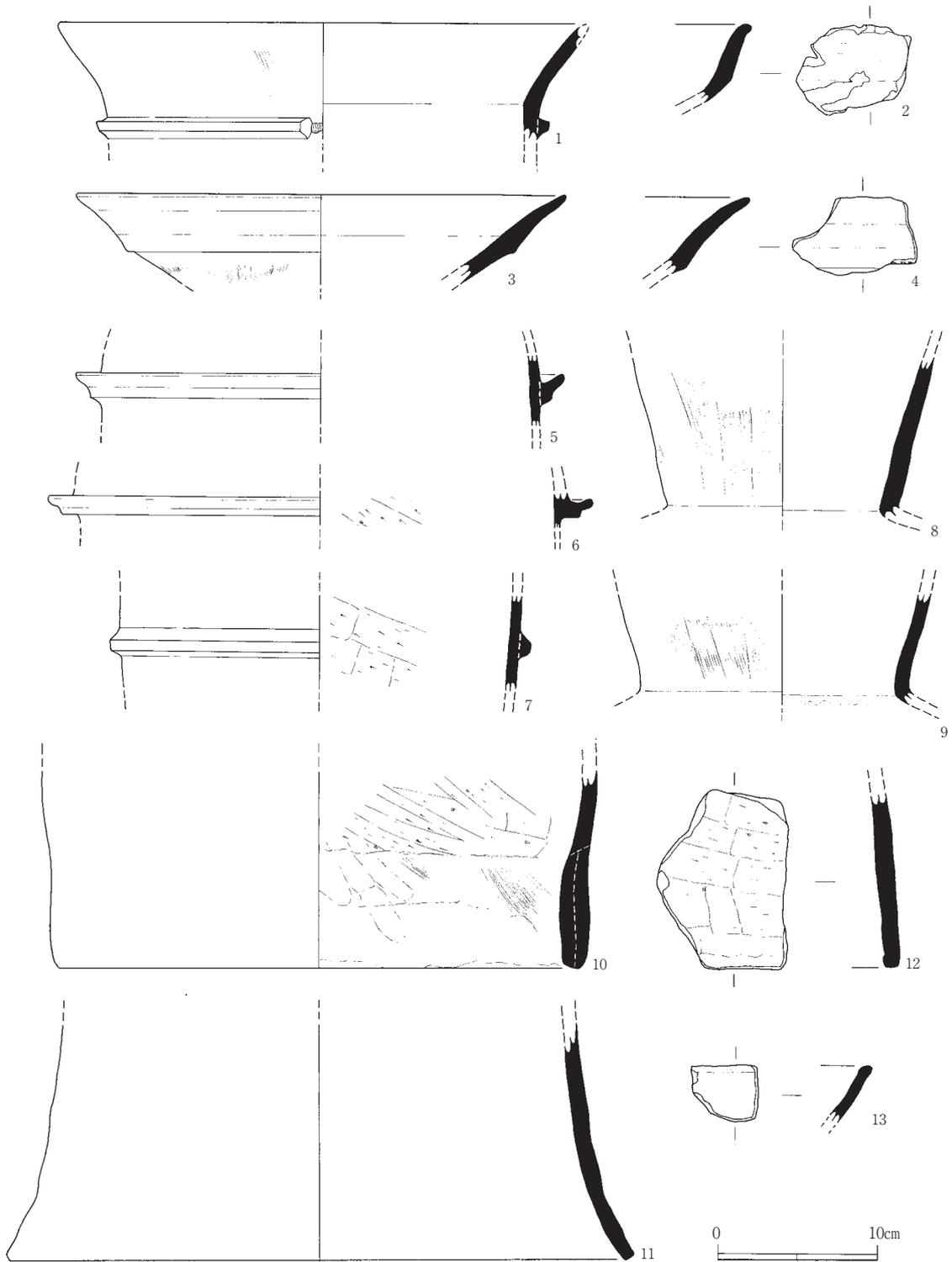
底部には二種類のものがある。一つは、厚さが1.8cm程度、直立ないしやや外傾するタイプで、外面にタテハケ、内面にケズリ、ナデ、ナナメハケが施される(10)。10の底径は32cm、残存率は20%である。他方は、内面のケズリによって厚さ1.1cm程度と薄く仕上げられるタイプである(11・12)。このタイプのものには、内傾し裾が広がっているものがある(11)。11の底径は39cm、残存率は15%を測る。双方とも最下段突帯までは残存せず、底部高は不明であ



図15 内面のケズリ調整



図16 受口状突帯



1・2・7・8・13：西クビレ部第2トレンチ、3～6・10・11：西クビレ部第1トレンチ、9・12：後円部第4トレンチ
 ※1～12：埴輪 13：土器

図17 出土遺物実測図

る。

外面タテハケや内面ケズリの多用、受口状突帯の存在、鱗付円筒埴輪が認められない点などを重視すると、これらの埴輪が古墳時代前期前半に位置づけられる可能性は高い。しかし、古相の特徴が残存する地域も存在するため、長尾山古墳の埴輪も北摂地域の古墳と広く比較して位置づけていく必要がある。現状では全形はもとより、突帯間隔や底部高の分かる個体がなく、透孔の資料にも恵まれていない。したがって、長尾山古墳の埴輪の特徴や時期を詳しく検討するためには、今後の調査における資料の増加が不可欠である。 (田中由理)

2 土 器 (図17、図版7・8)

長尾山古墳からは、埴輪以外にも西クビレ部において少数の土器が出土している。13は、布留式土器の口縁部の破片である。口縁端部は、内側に肥厚させて丸みをもった形状を示しており、器壁は6mmと厚くシャープさに欠ける。直口壺または甕の口縁部であろう。器面は激しく磨耗しているが、外面には赤彩を施した痕跡が認められる。平野を眼下に望む西クビレ部付近で、土器を用いた祭祀を行っていた可能性も考えられる。 (酒井)

第4章 古墳築造の土量算定と所要労働量の推定

1 算定の方法

今回の調査では、墳丘と周辺の地形測量を行うとともに墳丘西側を主体として7ヶ所のトレンチを設定して墳丘構造の解明を試みた。この結果、第2章に示したように墳形と墳丘規模の基本部分を把握することができた。発掘調査は今後も継続する予定であるが、ここでは今回の調査で得られた所見に基づいて、長尾山古墳の築造に要した土量と所要労働量の概数を算出してみたい。

実施にあたっては、先行実施例の大阪府弁天山C1号墳の手法を参考とした（原口・西谷1967）。基本的な考え方は、まず、想定される地山（旧地形）復元図、盛土前の地山削土図、盛土を施した墳丘完成図を描いた後に、長尾山古墳の場合だと土量算出に關係する標高114m以上の等高線をそれぞれの図についてペリオメーターで計測し、50cmコンター毎の面積を算出して各層の体積を算定する。そして、これらの体積を集計して差し引きすることにより、盛土量と削土量を算出するというものである。なお、墳丘の東側は未調査であるので、今回は墳丘主軸に対してほぼ左右対称の形状と考えると西側の土量の算出結果から全体土量を推定する。

2 旧地形と墳丘の築造

墳丘配置はやや東側の崖地寄りに偏り気味である。地形測量図を見るかぎりでは、東側の急傾斜地から離れてもう少し西側に配置するほうが丘陵尾根に対するおさまりが良いように思われる。ただ、墳丘を現位置より西に寄せた配置とすると前方部南西コーナーなどで盛土量が大きくなる。東側の発掘調査結果が待たれるが、基本的には可能な限り墳丘を東側に寄せて、地山整形を主にすることで労働量が少なくなる墳丘配置を企画したのではないかと推定される。

標高118m以下の部分についてはトレンチによる発掘調査より得られた地山レベルから推定して地山等高線を復元することができる。ところが、発掘区の範囲内で判明している地山の最高点は後円部で119.5mである。それより上方については情報が無いが、後円部墳頂のレベルは121.25mであり、墳頂から掘り込んだ埋葬施設の基底部を地山内に置いたと仮定すれば、おおむね120.5m付近までは地山があるものと推定してもよいのではないかと推定される。以上を勘案して築造開始前の地山推定等高線を作図したものが図18-aの地山復元図である。

築造にあたっては基本的には大きな削土はなく地山を部分的に削り出す程度で墳丘下半部の整形が可能であったと考えられるが、西クビレ部の1段目および2段目の形状が発掘調査で判明しているため、こうした整形に伴う削土を推定したものが図18-bである。

後円部については、2段目の基底石以上の高さが最大約4mであること、および小規模ながらも埴輪と葺石を備えた有力首長級の墳墓であることなどから、三段築成であったと考えてみる。段築の高さの比率は前期前半の古墳であることを勘案して、下部から1：2：3程度の比率と考

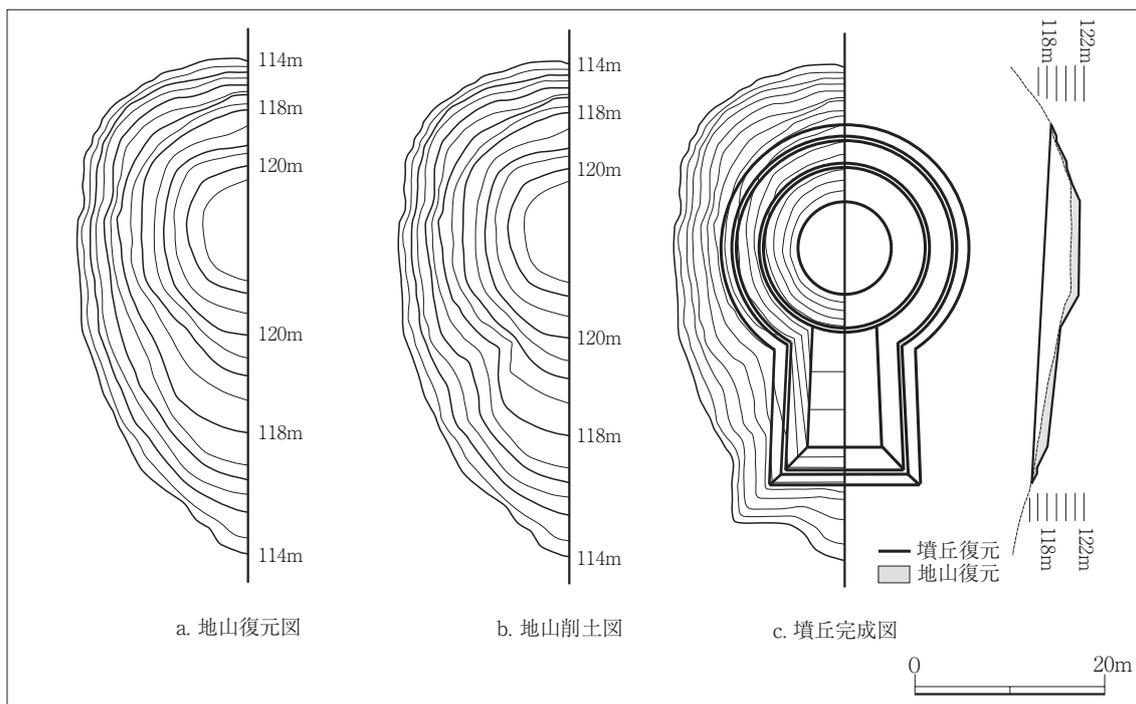


図18 墳丘築造過程の復元

える。頂部の直径は約10m程度、また現在の後円部最高点が121.25mであることから築造時の頂部の標高を121.5m程度であったと推定する。

前方部については、前方部第1トレンチの調査結果から二段築成と考える。墳丘主軸に沿った発掘調査は墳裾付近以外は未だ実施されていないので不確定の要素が大きいですが、前方部の段築の高さは後円部の下2段と同じ比率の1：2となるよう前端頂部の高さを推定した。この結果、前端部頂部の標高は118mとするとともに、後円部との境界の119.5m付近に向かって上り勾配と考える。以上を勘案して作成した墳丘完成図が図18-cである。

3 土量算定と所要労働量

以上のように整理してみると、盛土は後円部頂部付近と前方部前端部付近、削土はクビレ部付近が主体であったと考えられる。図18に示した地山復元図、地山削土図、墳丘完成図に基づいて土量算定した結果が表1であり、盛土および削土の概略のボリュームはそれぞれ390 m^3 と20 m^3 となった。この合計410 m^3 の土量に対して、労務歩掛りを大略4.5人/ m^3 （石川1989）と考えると、削土盛土工程には延べ1800人余りが投入された計算になり、これに築造前の整地工程などを加味すると長尾山古墳の墳丘構築には2000人程度の労働量を必要としたと推定される。調査情報は限られており仮定を重ねた部分が多いが、猪名川流域でほぼ最古とみてよい前方後円墳の築造にあたって、動員された労働力の規模をイメージする一助になれば幸いである。（横地 勲）

表1 長尾山古墳の築造土量算定（体積の単位：m³）

番号	高さ (m)	50cmごとの等高線の体積			A-B (盛土)	C-B (削土)	(A-B)-(C-B) (必要土量)
		墳丘の 復元図A	地山の 削土図B	地山の 復元図C			
1	121.6~121.5	4	0	0	4	0	4
2	121.5~121.0	27	0	0	27	0	27
3	121.0~120.5	36	4	4	32	0	32
4	120.5~120.0	47	35	35	12	0	12
5	120.0~119.5	62	55	55	7	0	7
6	119.5~119.0	79	75	75	4	0	4
7	119.0~118.5	113	96	96	17	0	17
8	118.5~118.0	139	123	123	16	0	16
9	118.0~117.5	164	147	148	17	1	16
10	117.5~117.0	192	182	186	10	4	6
11	117.0~116.5	227	217	220	10	3	7
12	116.5~116.0	256	248	250	8	2	6
13	116.0~115.5	291	284	285	7	1	6
14	115.5~115.0	322	312	312	10	0	10
15	115.0~114.5	354	346	346	8	0	8
16	114.5~114.0	383	376	376	7	0	7
西側の合計体積		2,696	2,500	2,511	196	11	185
全体の合計体積		5,392	5,000	5,022	392	22	370

第5章 調査のまとめ

前章までに述べたように、今回の調査では長尾山古墳が墳長39mの前方後円墳であること、少なくとも二段の段築成と葺石・埴輪を有すること、出土埴輪から見て前期前半にさかのぼる可能性が高いことなどを明らかにすることができた。これまで実態がほとんどわからなかった古墳だけに、墳丘形態や時期の基本的な情報が得られたことは西摂猪名川流域の古墳時代研究にとって意義のあることと考えられる。墳長30m台の小規模な前方後円墳にもかかわらず、葺石、段築成、埴輪列などの要素を備えている点は、この被葬者の系譜が定型的な前方後円墳のスタイルをいち早く導入するだけの政治的つながりを、初期大和政権との間に有していたことを示唆している。

埴輪については全形のわかるものはないが、有段口縁の器台に壺を乗せた形を表現したごく初期の朝顔形埴輪になると思われる受口状突帯の破片が含まれることは注目に値する。頸の長い壺部の破片もかなり見られることから、奈良県東殿塚古墳、大阪府玉手山3号墳などと同巧の例になる可能性が高い。突帯の突出度はやや減じているので、形式的にはこれら2者より若干後出する事例になろうか。整形は内面のケズリ、外面のタテハケが顕著であり、ケズリによって器壁をかなり薄く仕上げたものも目につく。

これらの特徴を猪名川西岸でもっとも古相の埴輪と考えられてきた宝塚市万籟山古墳のものと比較すると、ケズリやタテハケの多用という点でさらに古い様相を呈している可能性が高く、現時点では古墳編年でいうと前期前半（前方後円墳集成2期、広瀬1992）に含めうるものと理解している。破片数のわりには透孔部が見あたらない点やスカート状に開く器台的な底部を持つ個体が含まれる点からは、全体に定型化以前のバラエティ豊かな段階の埴輪であるという印象をうける。ただ、出土破片数はなお限られており、今後の継続調査の成果をふまえてあらためて検討を行いたい。

墳丘形態は、西クビレ部第1、第2トレンチで検出された葺石基底石列の走行方向、後円部第4トレンチで残存していた葺石起源の礫石群の位置などを勘案すると、前方後円墳と考えるのが現時点では妥当であろう。この点についても、原位置の葺石を確認できたトレンチはなお限られているので、確定的な判断は今後の調査にゆだねたい。

猪名川流域の有力古墳は、長尾山古墳を除けば前方後円墳または円墳で占められることが知られていた。今回の成果によって長尾山古墳も前方後円墳と認められるなら、この地域における初期の古墳はすべて円丘系統となる。近年、猪名川流域では弥生後期～終末期の墳墓が徐々に確認されるようになってきたが、豊中市服部遺跡（前方後円形）、同豊島北遺跡（円形）、伊丹市口酒井遺跡（円形）などのように、やはり円系墳墓の普及がうかがわれる。その意味でも、長尾山古墳が従来有力視されてきた前方後方墳でなく前方後円墳であると認められるなら、当地域における円丘系墳丘の伝統の根強さをいっそう際立たせることにもなるのである。

1969年の測量調査時に指摘されていた墳頂部の「粘土槨」の露出は、今回の調査では確認でき

なかった。当時は明瞭に観察できたということなので、その後の公園整備時に墳頂部の土入れなどが行われた可能性もある。ただ、古墳の築造年代が前期でも相対的に古い段階にさかのぼると、竪穴式石室が主流を占める西摂地域の前期古墳の中では粘土槨は異質な存在になる。竪穴式石室の被覆粘土である可能性も含めて、慎重に検討していく必要がある。当時確認された「粘土槨」の主軸方向が、墳丘主軸と斜交してほぼ南北方位とされていることは、築造時期が古くなればむしろ理解しやすくなる。奈良県ホケノ山墳墓、京都府椿井大塚山古墳、滋賀県雪野山古墳などに見られるように、前期前半までの有力墳の中には、南北頭位で主軸斜交の埋葬施設を有する事例が散見されるからである。なお、現在墳頂平坦面には測量調査後に周辺の宅地開発に関連して埋設されたと思われるコンクリート杭が2基存在している。埋葬施設を損壊している可能性もあるので、早急な対処が望まれるところである。

今回の調査で長尾山古墳の基本的な情報を明らかにできたことによって、猪名川流域の古墳時代政治史の流れは以前より明瞭になってきたといえる。まず前期の有力古墳は、支流の小河川に隔てられた豊中台地、待兼山丘陵、池田、長尾山丘陵などにそれぞれ営まれた。これら諸首長の先陣を切る形で、前方後円墳という畿内政権の葬送儀礼をいち早く受け入れたのが長尾山古墳の被葬者という理解になろう。しかし、中期になると、これら小地域の間で盛衰の差が著しくなり、南の猪名川中流域の豊中市桜塚古墳群と伊丹市南部から尼崎市域に広がる猪名野古墳群にのみ有力古墳が集中して築造されるようになる。6世紀前葉には一転して、その桜塚古墳群や猪名野古墳群は衰退傾向が顕著となり、これと入れ替わるようにふたたび猪名川上流域の長尾山丘陵や池田市域に川西市勝福寺古墳や池田市二子塚古墳などの有力古墳が現れるのである。

猪名川流域でこうした変化の認められる時期が、大王墓が大和盆地から河内平野へ移動する時期、河内平野から淀川水系へ移動する時期とほぼ一致していることは、偶然とは言い切れない意味を持っているように思われる。地域の盟主的首長権の移動が中央政権の政治変動と連動する可能性は、畿内では京都府南部の乙訓地域のケーススタディから提起されているが（都出1988）、西摂猪名川流域でもそうした検討に足るだけの調査成果が期待されるのである。長尾山古墳の調査はいままさに着手したところである。今後、近隣の前期古墳との比較を含めて、さらなる実態解明を進めてゆきたい。

（福永）

参考文献

- 石川 昇 1989『前方後円墳築造の研究』六興出版
- 梅原末治 1937「摂津万籟山古墳」『近畿地方古墳墓の調査 上野国総社二子塚古墳の調査』日本古文化研究所報告第4、日本古文化研究所
- 鐘方正樹 2003「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号、埴輪検討会
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第62巻第2号、日本考古学会
- 清家章編 2000『今里大塚古墳第3次・井ノ内車塚古墳第3次調査概要』大阪大学井ノ内車塚古墳調査団
- 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号、考古学研究会
- 都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22、大阪大学文学部
- 都出比呂志・福永伸哉編 1992『長法寺南原古墳の研究』（大阪大学文学部考古学研究報告第2冊）大阪大学文学部考古学研究室
- 寺前直人・高橋照彦編 2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究』（大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊）大阪大学文学研究科考古学研究室
- 寺前直人・福永伸哉編 2007『勝福寺古墳の研究』（大阪大学文学研究科考古学研究報告第4冊）大阪大学文学研究科考古学研究室
- 直宮憲一編 2007『国指定史跡中山荘園古墳保存整備事業報告書』宝塚市教育委員会
- 橋本 久 1975「古墳は語る」『宝塚市史』第1巻、宝塚市
- 原口正三・西谷 正 1967「弁天山C1号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府教育委員会
- 櫃本誠一 1971「長尾山古墳外形測量調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集、兵庫県教育委員会
- 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」（近藤義郎編『前方後円墳集成—近畿編—』）山川出版社
- 廣瀬 覚 2003「摂津猪名川流域における前期古墳の埴輪とその系譜」『古代文化』第55巻第9号、古代学協会
- 福永伸哉編 1990『鳥居前古墳—総括編—』（大阪大学文学部考古学研究報告第1冊）大阪大学文学部考古学研究室
- 福永伸哉 2004「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書、大阪大学大学院文学研究科
- 森岡秀人・吉村 健 1992「摂津」（近藤義郎編『前方後円墳集成—近畿編—』）山川出版社

圖 版



1 長尾山古墳の立地（中央頂部、南から）



2 西クビレ部付近の墳丘現状

図版 2



1 後円部第1トレンチ (南西から)



2 後円部第2トレンチ (西から)



1 後円部第3トレンチ
(北西から)



2 後円部第4トレンチ (北西から)

図版 4



1 西クビレ部第1トレンチ (南西から)



2 西クビレ部第1トレンチ葺石・埴輪部分
(南西から)



3 同 (西から)



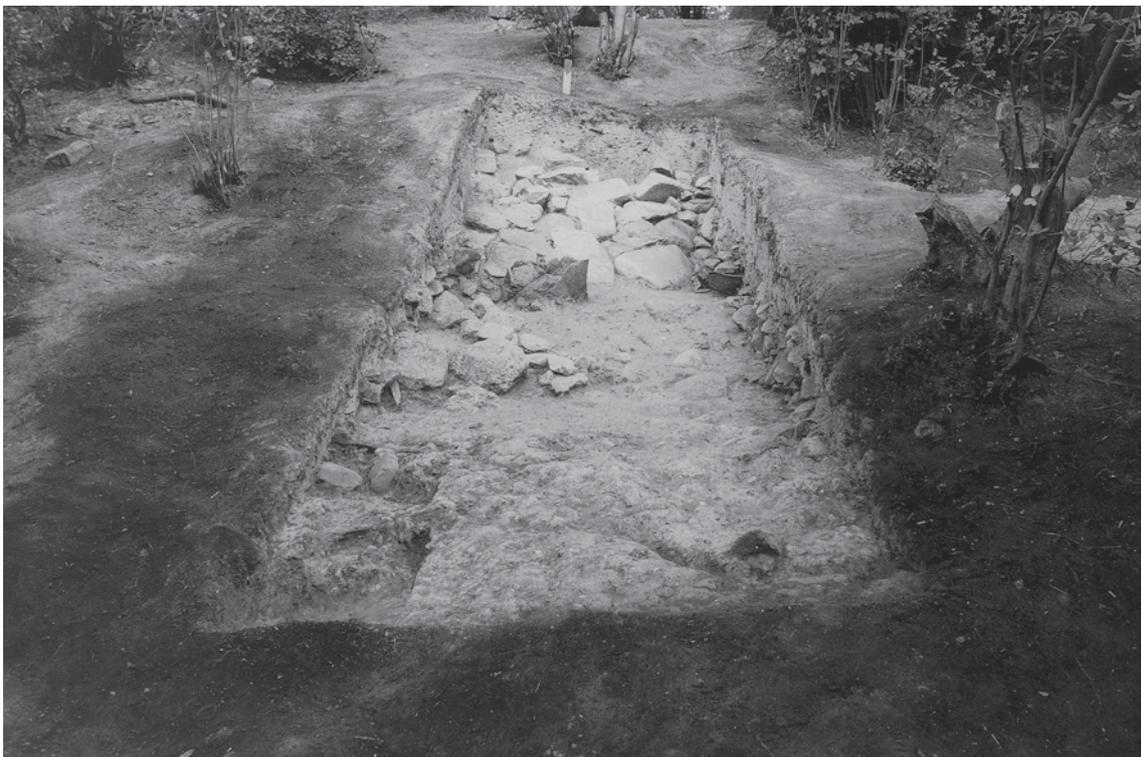
4 西クビレ部第1トレンチ1段目テラスと
2段目斜面 (北西から)



5 西クビレ部第1トレンチの土層堆積
(東から)



1 西クビレ部第2トレンチ (南から)



2 同 (南から)

図版 6



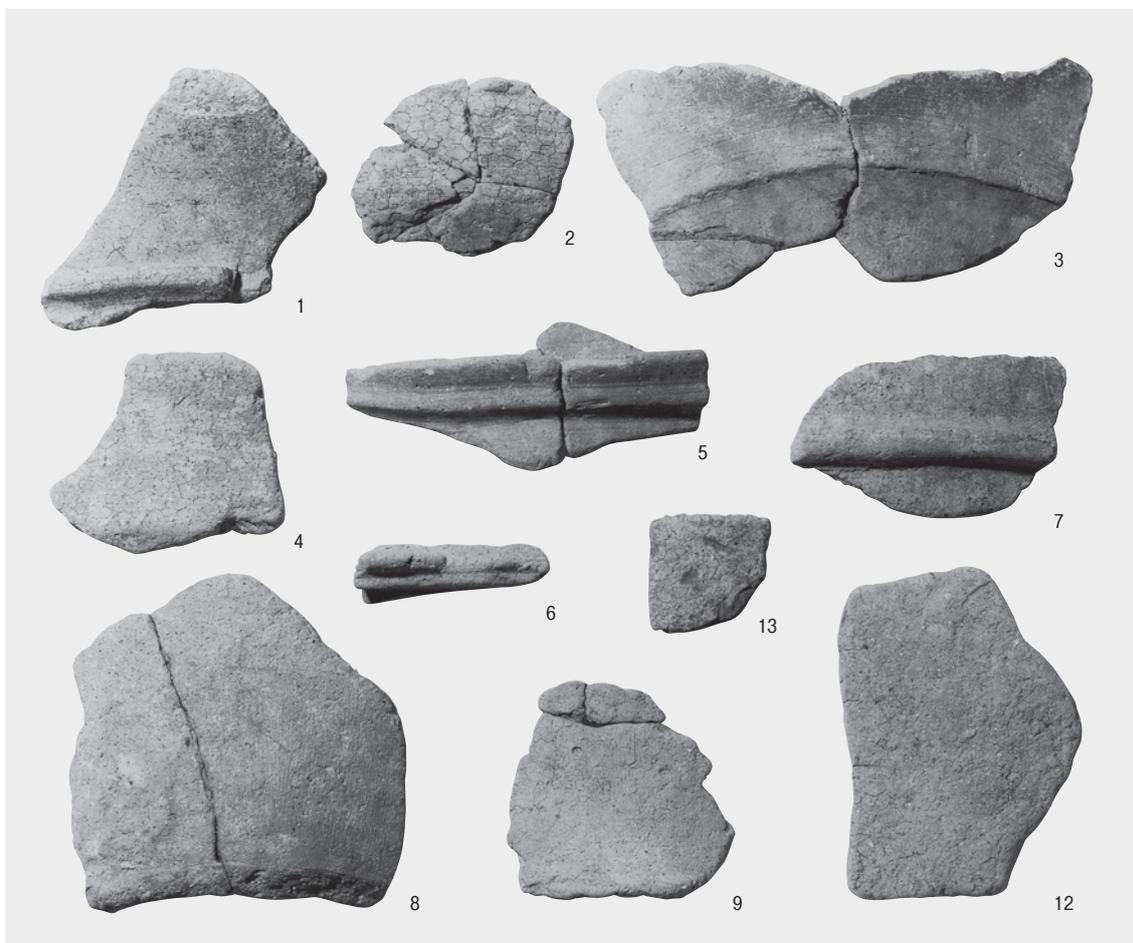
1 西クビレ部第2トレンチの土層堆積（南西から）



2 前方部第1トレンチ（南東から）



3 前方部第1トレンチ1段目と2段目(右奥)の葺石

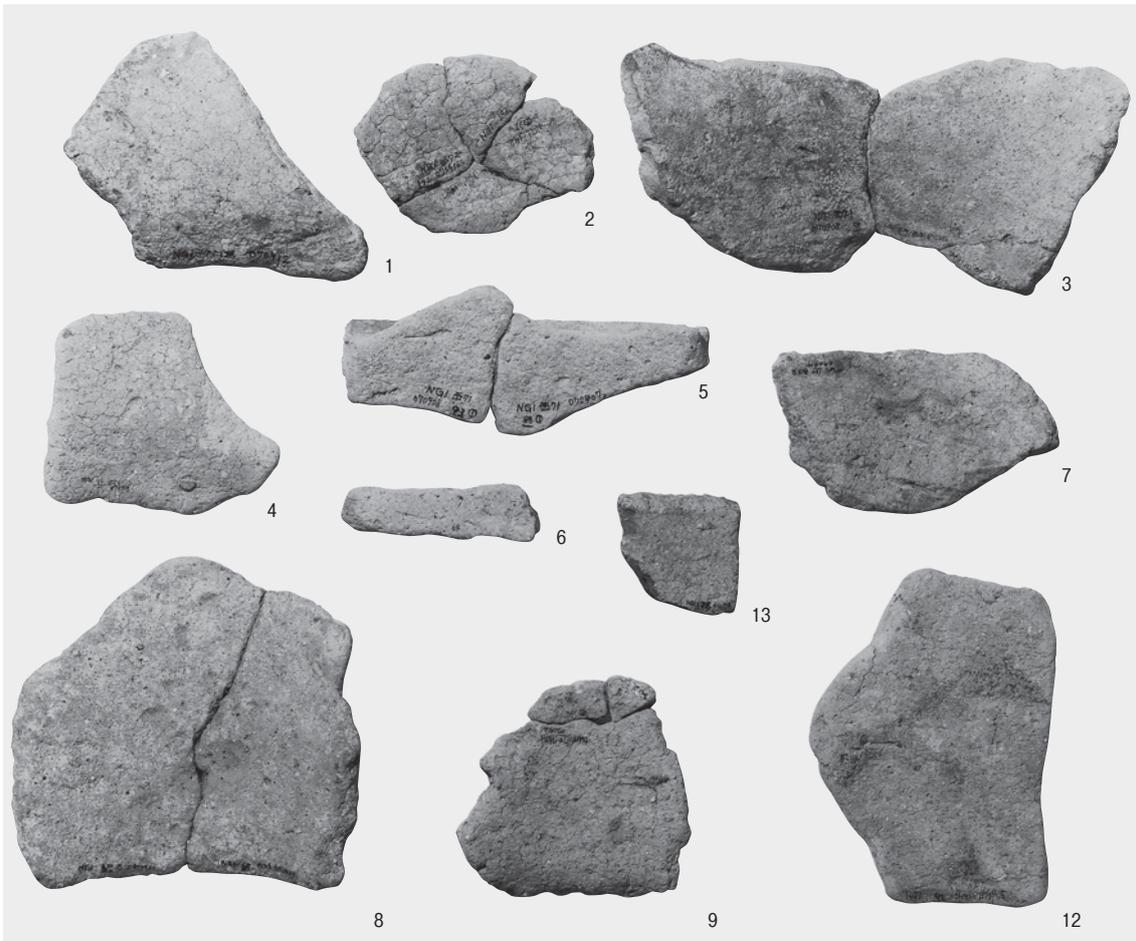


1 埴輪（胴部、口縁部）と土器 外面

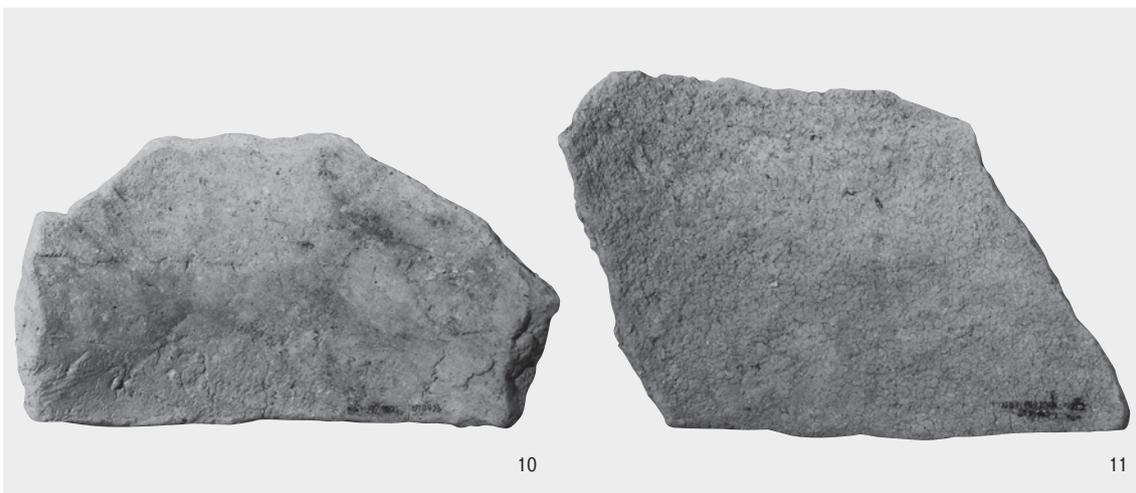


2 埴輪（底部）外面

図版 8



1 埴輪（胴部、口縁部）と土器 内面



2 埴輪（底部）内面

報告書抄録

ふりがな	ながおやまこふんたいいちじはくつちょうさがいほう				
書名	長尾山古墳第1次発掘調査概報				
副書名					
編著者名	福永伸哉、寺前直人、中久保辰夫、田中由理、木村理恵、酒井将史、高上 拓、田村美沙、前田俊雄、野島智実、横地 勲（編集：福永伸哉）				
発行機関	大阪大学文学研究科考古学研究室				
所在地	〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5				
所収遺跡名	所在地			コード	
長尾山古墳	兵庫県宝塚市山手台東1丁目4-424			市町村	遺跡番号
				28214	40
北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
34度49分32秒	135度23分04秒	20070827～ 20070924	55㎡	学術調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長尾山古墳	古墳	古墳時代	古墳葺石 テラス面 円筒埴輪列	埴輪・土師器	葺石、段築、埴輪列を有する4世紀初頭の墳長約39mの前方後円墳であることが判明。

長尾山古墳第1次発掘調査概報

2008年9月発行

編集 大阪大学文学研究科考古学研究室
(代表 福永伸哉)

発行 大阪大学文学研究科考古学研究室
〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

印刷 有限会社 真陽社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
